

限定の「ばかり」とは

陳 連 冬*

キーワード： 個限定，類限定，特定，非特定

要 旨

本稿は限定を表わす「ばかり」を「ばかり₁」と「ばかり₂」に分けようとした。前者は「だけ」との置き換えが可能で、いわゆる個限定と類限定の両方を表わせる。後者は類限定だけを表わす、つまり、「だけ」で置き換えることができないものである。それを証明するために、両者の限定の文脈にそれぞれとくに現われやすいものを求めた。まず、副詞は「ただ」グループと「いつも」グループに分けられ、「ただ」グループは「ばかり₁」に出、「いつも」グループは「ばかり₂」に出るのが多い。また、一部特殊な文脈、たとえば、動詞の進行形の真ん中や増長する意味の動詞の現在形を同時に要求するのは「ばかり₂」で、とくにそれを要求しないのは「ばかり₁」である。最後に、「ばかり₁」の限定の対象に特定化できる傾向があるが、「ばかり₂」の限定対象は特定化できないのである。

本稿は日本語の限定表現¹の一つである「ばかり」について考えてみたい。今まで²、どちらかといえば、限定を表わす「ばかり」を一つの同質なものとして「だけ」などと対立すると考えてきたが、実は「ばかり」の内部にもかなり込み入った違いがあり、また「ばかり」は「だけ」とはそれほど極端に離れているのではなく、かなり重なる部分があるのではないかと思われる。

* CHEN Lian Dong: シンガポール国立大学 (National University of Singapore) 文学および社会科学院日本研究学科講師。

¹ 「ばかり」の中で、用法が固定化して、接続助詞や接尾辞に変わっている次のものもあるが、今度は検討の視野から外された。

- 九時を過ぎたばかりであった。
- 田崎は今にも美沙子の手をとらんばかりにした。
- その家へ帰りたくないばかりに、こうやって、愚図愚図しているようなものでもあったらうか。
- それよりも、あの涼子さんと高坂は、親しくしているばかりか、涼子さんはここで聞いた話を全部喋っているらしいんです。

² 陳連冬『「ばかり」の限定について』(1993年10月25日シンガポール国立大学日本研究学科主催の第三回国際シンポジウムにおける口頭発表および陳連冬「「だけ」と「ばかり」について——個限定と類限定の観点」(『青山語文』22号, 1992)を参照されたい。

1. 限定の「ばかり」の下位分類

「ばかり」を考えると、避けられない問題は、同じく限定を表わす「だけ」との対照である。実際に日本人の「ばかり」の使用状況を調べるとき、少しニュアンスの差があるとはいえ、実例では「ばかり」になっているものの半分を越すものが「だけ」に置き換えられるのである。また、そうかといって、他の一部の事例は、「だけ」との置き換えができないのである。限定を表わす「ばかり」のこの二つの大きな分かれは、「ばかり」の本質を理解する上でも、「だけ」との関係定義の上でも、重要な意味を持つと思う。本稿では、前者「だけ」と置き換え可能のものを「ばかり₁」とし、後者を「ばかり₂」として、論を進めていきたい。ただし、「ばかり₁」と「ばかり₂」のこの分類は絶対的なものではなく、その間には、段階的により「だけ」に置き換えやすいとか、より置き換えにくいとか、あるいは全然できないなどの程度の差が当然ある。「ばかり₁」と「ばかり₂」の分類は、あくまでもその用例が日本語の限定表現の中でより「だけ」に近いものなのか、あるいは「ばかり」的なものの傾向を表わすものである。

さて、次は「ばかり」の実例をすこし挙げて、「ばかり₁」と「ばかり₂」とは実際に何を指しているのかを見ておきたい。

① 「しかし、私は、お嬢さんの口からじかに聞いております」

「黙りたまえ」矢部社長は、怒鳴りつけた。

「しかし、こればかりは、黙ってられません。私は、昨夜の喧嘩のことについては、一切、弁解いたしません。」(源氏鶏太『青年の椅子』)

この例文は「ばかり」の実例である。しかし、この文の「ばかり」のところを隠して、日本人に「だけ」と「ばかり」のどちらか一つを入れてくれと頼んだら、どれぐらい実例と同じように「ばかり」を入れてくれるだろう。どちらかが正しいというのではなく、ここにおいては、「だけ」と「ばかり」の間にそれほど違いを感じなかったところに意義があると思う。こういう「だけ」との差が小さく、選択に迷うような「ばかり」を「ばかり₁」とするのである。

② じゃが、ここにいる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。

(芥川龍之介『羅生門』)

②の例文になると、ほとんどの日本人は「ばかり」を選んで、「だけ」を選ばないのではないか。こういう「だけ」と混乱することのない「ばかり」を「ばかり₂」とするのである。

しかし、「ばかり₁」と「だけ」とは限定の強さに若干差がある程度だから、言語使用のゆれとして処理してもいいのではないかと、という人がいるかも知れない。そんなことをいうなら、「ばかり₂」でも、同じことがいえる。例文2においては「皆」という邪魔ものを取り外せば、ただちに「だけ」との置き換えがしやすくなり、結局のところ、「だけ」と「ばかり」の本当の違いを分からずじまいにしてしまうことになる。

「だけ」の限定はそれの前接部分の一つの個体とみなし、その前接部分の指すもの以外を除外した上でそれに限るという意味を表わす。「ばかり」はその前接部分を一グループの代表とみなし、その代表が「ばかり」の前に現われることによって、そのグループ全体の背後にあるのをほめかすのである。陳(1992)では、このことを個限定—「だけ」と類限定—「ばかり」と分けたことがある。しかし、以上ご覧の通り、個限定と類限定の規定は「だけ」と「ばかり」を極端に違ったものだとする立場からの分析である。類限定の特徴は、もっとも「ばかり」的な「ばかり₂」には当てはまるけれども、「だけ」と「ばかり」の中間にある「ばかり₁」にはぴったりあわないところが出てくるのである。

また、「だけ」と「ばかり」の限定の違いの立場からだけでなく、「ばかり₁」と「ばかり₂」自身のいろいろな文法的共起現象においても、違う現われを呈しているのではないか。

2. 「ばかり₁」と「ばかり₂」とその特徴

2-1.

副詞の分類はさまざまな角度から行うことができる。「ただ」によって代表されるグループの副詞には、たとえば、「たった、ただ、僅か、単に、独り」などが挙げられる。これらの副詞は、いずれも「そのみだ」という意味を表わし、いってみれば、本稿で前述した個限定の「だけ」に相通ずるところがある。実例を挙げるまでもないが、「だけ」の実例に、これらの「ただ」グループの副詞が出る確率が高いのである。しかし、「ばかり」の実例を調べれば分かるように、先ほどふれた「ばかり₁」——つまり、「だけ」との置き換えが可能な文——においても、「ただ」グループの副詞がよく出てくるのである。少し実例を挙げておこう。

- ③ ただ青い草の匂いがさめて、不揃いにもじゃもじゃするばかりである。(夏目漱石『門』)
- ④ 馬琴の経験によると、自分のよみほんの悪評を聞くと言う事は、単に不快であるばかりでなく、危険も又少くない。(芥川龍之介『戯作三昧』)
- ⑤ が、このときよきするらしいけはいをもらしたのは、独り乙州ばかりではない。(芥川龍之介『枯野抄』)
- ⑥ おれの人生のまわりの明るさなんぞ、たったこれっ計りだと思っているが、……(新聞『プロ野球』)

これらの文は、そのまま「ばかり」を全部「だけ」に取り替えてもそれほど違う意味の文にならないだろう。というより、「ただ」グループの副詞に対して、むしろ、「だけ」で呼応した方がよりいいという日本人がいるかも知れない。これらの文を通して、「ただ」グループ副詞が個限定の「だけ」と相性がいいといえると同時に、「ばかり₁」にも個限定の「だけ」的な部分があるのではないかと考えられる。

「いつも」によって代表される副詞グループには、「いずれも、みんな、皆、どれも、どいつもこいつも、ほとんど、しきりに、あれやこれや」などが考えられる。これらの副詞は皆「ある一つのものに限定しないで、多くのものの中に抱え込む」という包括的意味を持つ。これらの意味は筆者の類限定の「ばかり」と一部共通していると思う。事実、筆者が集めた「だけ」と「ばかり」の用例の範囲内で「いつも」グループの副詞を調べたところ、「いつも」グループの副詞は、ほとんど「ばかり」の文に現われたものである。森田(1972)が「だけ」と「ばかり」の違いにふれたときも、「ばかり」の文の副詞「しきりに」や「何度も」がよく現われるという、筆者と類似の現象を指摘したことがある。「だけ」の文に、「いつも」グループが全然出られないという、誤解を招きやすい。正確に言えば、「いつも」グループの副詞が、限定の意味の「だけ」と呼応して文に出てくるかというべきである。それは皆無までいなくても、非常に少ないといえる。正確な調査をしたわけではないが、1342例の「だけ」文においては、わずか4例だけが「いつも」グループ副詞と副助詞「だけ」が呼応するだろうと思われる文である。二つ挙げておこう。

- ⑦ まあ簡単にいうと、ここはニッケルだけでたっている商売の島ですからね。白人にしろわずかな日本人にしろ、みんなこのヌーメアにいるだけで、あとは四国ほどの大きさのこの島、どこ歩いても赤い山と土人部落がパラパラとあるだけ、あとは何もない。(森村桂 『天国に一番近い島』)
- ⑧ いつも片面だけをこちらに向けて壁に掛けられている飾り太刀であるから、それでよいであった。(『月刊言語』1993.4)

しかし、周知の通り、「だけ」と「ばかり」の文のすべてに、「ただ」グループと「いつも」グループとのいずれかが必ず形として出てくるとは限らない。むしろ、「だけ」と「ばかり」の用例の絶対数からいって、これらの副詞のいずれもが出ない文の方が多いのである。だから、それを「ばかり₁」と「ばかり₂」および「だけ」を見分ける絶対的な基準とはみずに、「ただ」グループが出れば、「だけ」が出やすく、「いつも」グループが出れば、「ばかり」で呼応するのが多いという目印程度のものでみてもらいたい。

ここで問題になるのは、「ばかり₁」である。前述の通り、「ばかり₁」は「いつも」グループの修飾を受けられるだけでなく、「ただ」グループの修飾をも受けられる。つまり、ともに「ただ」グループの副詞の修飾を受け、「だけ」との置き換えが可能な「ばかり₁」は同じ文法的特徴を持つ個限定の「だけ」そのものとどう違うかである。

「ばかり」の中から、「ばかり₁」だけを取り出して、「だけ」と同じく個限定にしてしまうのも方法の一つだが、「ばかり₂」との整合性から考えれば、よい選択ではない。第一、「ばかり₁」と「ばかり₂」とを分けた基準がそれほど精密で、不変なものでもない。また、ネイティブスピーカーに聞くと、「ばかり₁」を「だけ」に変えることができるといいながら、なんだかその間のニ

ニュアンスの差があるともいうのである。

ここにおいて筆者が考えた解決策は、つまり、「ばかり₁」の中に類限定を認めると同時に、個限定をも認めておくのである。「ばかり₁」は、一身に二役を果たしていることになる。これに対して、「だけ」は個限定を、「ばかり₂」は類限定を、それぞれ一つの機能だけを担当しているのである。「ばかり₁」は一身二役だから、「だけ」のように、「ただ」グループの修飾を受けられる、また同時に、「ばかり₂」のように、「いつも」グループの修飾を受けられる、という二重の性格を持つ。「ばかり」が「だけ」と混用されるのは、「ばかり₁」の場合であり、それは、「ばかり₁」の中に、「だけ」の意義要素が入り交じっているからである。

2-2.

山中美恵子氏は山中(1993)において、「だけ」と「しか」は同じ限定を表わすことばだが、なぜ重なって用いられることができるかについてふれたところがある。「だけ」は要するに、その前接部分が指すもの以外を排除する限定であるのに対して、「しか」はその前接部分に限定する以前に、その成立にある期待・予測をもっていて、そして、それが結局成立しなかったという含みがあるのだと指摘している。両方の限定は違う次元だから、相補的に同じところに現われるのであるという。

⑨ 5人だけしか来なかったから、野球ができなかった。(山中 例(29))

「だけ」の部分つまり「6人、7人ではないのだ」ということを表わし、「しか」の方は、「5人以上の数量を期待・予測していたが、成立しなかった」ことを含んでいる。「だけ」の限定の上に「しか」の期待はずれを加える表現になるのである。そのため、次の二つの文において、「だけ」と「しか」は時に使えなかったりするのである。(「#」は山中論文で非文を表わす)

⑩ A: パリへ行かれたことがありますか。

B: a. はい、一度だけ行ったことがあります。

b. # はい、一度しか行ったことがありません。(山中 例(30))

⑪ A: パリへはよく行かれるのですか。

B: a. # いいえ、一度だけ行ったことがあるんです。

b. いいえ、一度しか行ったことがないんです。

c. いいえ、一度だけしか行ったことがないんです。(山中 例(31))

⑩で「パリへ行った」という事態が存在したかどうかの問題となっている場合は、「だけ」が使用でき、「しか」が使用できない。⑪では「パリへ行った」事態がすでに存在しているが、「よく」で表わすように、実際の数量より多い数量が期待・予測されている場合は、「だけ」のみでは不適切な文となり、少なくとも、「しか」を使わなければならないのである。

なるほど、こう解釈すれば、「だけ」と「しか」の重なりは相補的存在だから、よけいな蛇足

ではないことが分かる。ただし、山中(1993)では、「ばかり」のことについてふれていない。「ばかり」は山中論文の射程に入らないことは認めるが、たとえ、山中説を「だけ」と「ばかり」の重なりに当てはめようとするとき、支障が出るのである。「だけ」と「ばかり」はときどきお互いに置き換えて用いられることがあるが、ニュアンスの違いがある、などの点においては、「だけ」と「しか」の関係と同じく相補的である。が、なぜなのか、「だけしか」の形で用いられる日本語の文があるのに、「だけばかり」あるいは「ばかりだけ」の形で用いられた日本語の文をみたことがない。

こんなところに、本稿の、「ばかり」の中の「ばかり₁」には「だけ」と「ばかり」の両方の役割を兼ねて持っているという考えが役にたつと思う。つまり、話し手が個限定と類限定を同時に行いたいとき、「だけばかり」あるいは「ばかりだけ」とわざわざ二つを重ねることなく、「ばかり₁」一つで個限定と類限定を同時に表現してしまうのである。「だけ」と「しか」の場合は、たまたまお互いに相手をも兼ね持つ「ばかり₁」たぐいのものがなかったもので、そのまま両者を重ねて用いたが、「だけ」と「ばかり」は「ばかり₁」の存在で簡単に済ませたとと思われる。

2-3.

次の二つの文は実例ではないが、いずれもネイティブスピーカーの協力を得て、作ったものである。これらの文には先述の両グループにわたる「いつも」と「ただ」が同じ文にでているものである。

⑫ 彼はいつもただ研究 ばかりやっている。

だけ

⑬ いつもただ山田さん ばかりが遅れている。

だけ

⑫ ⑬ では「ばかり」を使っても「だけ」を使っても構わないのである。「ばかり」と「だけ」が出たからといって、それと相性のよい副詞が必ずペアで出るとは限らないこと、前の方でふれたことがある。しかし、ネイティブスピーカーの反応をよくよく観察すれば分かるが、これらの文においては、「だけ」よりも、「ばかり」を使った方がよりよいという意見が多いのである。これは、おそらく、次のように解釈できると思う。「だけ」は個限定の一点張りだから、「ただ」のほかに、類限定と相性のよい「いつも」も文と一緒に出ているので、個限定と類限定の両方を兼ねて表現できる「ばかり₁」の方がここで望ましかったためだろう。

⑫ ⑬ からもう一つ注意すべきことは、「いつも」と「ただ」の順序と「ばかり₁」との関係である。⑫ ⑬ を次のように、

⑫' 彼はただいつも研究 ばかりやっている。

だけ

⑬' ただいつも山田さん ばかりが遅れている。

だけ

にすると、微妙な変化が起こるのである。結果を先にいえば、⑫' ⑬' はいずれも普通の日本語としてはあまりみられない表現だそうである。「ただ」はもともとそれと呼応関係にあった「研究」や「山田さん」との結びつきが、「いつも」の介入によって断たれた感じがするというのである。⑫' が実際に用いられる場面は非常に想像しにくいそうだが、⑬' で考えれば、「ただ」は文の一部である「山田さん」にかからなくなり、その「ただ」の後ろにある「いつも山田さんばかり(だけ)が遅れている」全体にかかるようになり、そして、⑬' は ⑬ と違って、「いつも山田さんだけが」という「山田さん」を問題にする意味でなくなり、たとえば最近の会社の状況についていうとき、敢えて不本意なところを挙げるとすれば、「唯一」→「いつも山田さんばかり(だけ)が遅れていること」という「山田さんがよく遅刻する」こと全体を問題にする意味になるそうである。下線でその関係を表わせば、「ただいつも山田さんばかり(だけ)が遅れている」になってしまう。「山田さん」にかかる副詞には「ただ」の消滅(もっともスケールのもっと大きい文に移っただけだが)によって、「いつも」だけが残ることになる。だから、⑬' の「山田さん」の後ろに「だけ」の出る確率がなおさら低くなり、「ばかり」の方が、むしろ、唯一の選択になるのだろう。また、「ただ」がその後の全体にかかることになったことは、われわれは、⑬' の最後に一つよけいに「だけ」を加えても意味構造の変化を起こさないことをも予想できるのである。

⑬'' ただいつも山田さんばかり(だけ)が遅れているだけ。

このことから、われわれは、次のような推察ができる。限定の副助詞にかかわる「いつも」グループと「ただ」グループの副詞の前後順序の特徴からみれば、副助詞によって表現される日本語の個限定と類限定も、ちょうど逆の順序になっているのではないかと、逆の推理ができる。つまり、個限定と類限定が同時に現われ、しかも、たとえ「だけ」と「ばかり」が同時に用いられるとしたら、個限定は必ず先に来て、類限定は必ずその後につく、「だけ」と「ばかり」は「だけばかり」の順序であり、決して「ばかりだけ」の順序ではないことになる。ただし、「だけばかり」というものは実際に日本語に存在しないから、われわれは、個限定と類限定の両方を併せて担当する「ばかり₁」に「だけばかり」がミックスしていると考え、「ばかり₁」の中でも個限定が前半で、類限定が後半になっているとでも考えられよう。⑫ ⑬ の二グループの副詞の順序が逆の方向からそれに対応している恰好である。⑭ は □ □ という限定される対象を中心に、前の方向へ行っても個限定、類限定と、後ろの方向へ行っても個限定、類限定の順となっている。

⑭ 「いつも」グループ → 「ただ」グループ → □ □ ← ばかり₁

つまり、限定の副助詞「ばかり₁」の中味は、個限定と類限定の二部からなっていて、しかもその限定は個 → 類の順序である。それに対応する副詞はちょうど逆の順で副助詞にかかっている

のである。

3. 文脈の特徴と「ばかり」

個限定と類限定は、以上のように「いつも」「ただ」とのかかわりで、さまざまな様相を呈するのを見たが、他にもいくつか関係のある文脈的特徴がある。

3-1.

まず、類限定がとくに要求する、動詞の形態にかかわる文脈を二つみてみたい。

- ⑮ 私はヌーメアの港で、一日中ぼんやりと見ていたり、広場で寝てばかりいる土人たちと、この一行があまり違いすぎるのに驚いていた。(森村桂『天国に一番近い島』)
- ⑯ そんなに遊んでばかりいないで、少し勉強しなさい。(国立国語研究所『現代語の助詞・助動詞』)

⑮ ⑯ はいずれも「ばかり」が動詞の進行形の間に入り込んだものである。こういう用法に「だけ」が皆無とまでいかなくとも、非常に少ないことがいえる。⑰ は筆者がみつけた唯一の実例である。

⑰ ただこの雰囲気

にひたってだけ

いようと思った。(森村桂『天国に一番近い島』)

⑰ は特殊な用例だと思うが、動詞の進行形に入り込む用法は、類限定にもっともあう文脈である。⑮ ⑯ の「ばかり」はどちらも「だけ」で置き換えることができない、いわゆる「ばかり₂」に属するものである。

次の実例も類限定が要求する文脈を持つ文である。

⑱ 此頃では貫治の葉代はふえるばかりである。(林芙美子『林芙美子傑作集』)

⑲ 十三子の気持ちは、妙に昂まってゆくばかりである。(源氏鶏太『青年の椅子』)

⑱ ⑲ のポイントは、「ばかり」の前にある動詞は必ず現在形であり、かつ、どんどん増長する、拡張する意味を持つものでなければならない。⑱ の「ふえる」と⑲ の「昂まってゆく」は、ともに現在形であり、増長する、拡張する意味を持つなどで、上の条件にあっている。案の定、⑱ ⑲ の「ばかり」も、「だけ」で置き換えることのできない「ばかり₂」である。しかし、次の文は上の条件にあわないから、類限定だけの「ばかり₂」の解釈が成り立たなくなり、「ばかり₁」という個限定と類限定が同体かあるいは相互置き換え可能なものと理解しなければならない。

⑳ すっかり荷づくりをして、運び出すばかりになっている。(森村桂『天国に一番近い島』)

㉑ そのためレイ子呼びたいが口を開いてもかすかに声帯が震えてヒィーというかすれた音がするばかりだ。(村上龍『限り無く透明に近いブルー』)

㉒ が、娘はやはり首を振ったばかりで、何とも返事を致しません。(芥川龍之介『地獄変』)

㉓ 自分は生活に疲れているばかりではない。何十年來、絶え間ない創作の苦しみにも疲れている。(芥川龍之介『戯作三昧』)

㉒ ㉑ は動詞の現在形にはなっているが、動詞の意味は増長する、拡張するものになっていない。一方、㉒ ㉓ は動詞が過去形と進行形になっているから、これも類限定しかなりたない「ばかり₂」ではない。その証拠に、㉒ ㉑ ㉒ ㉓ の「ばかり」はいずれも「だけ」で置き換えることができるのである。

3-2.

もう一つ、個限定になるか、類限定になるか、つづいて、「だけ」に置き換えられる「ばかり」かどうか、を決める鍵がある。本稿では、それを特定、非特定と呼ぶ。つまり、個限定を受けている対象は、特定されている場合が多いが、類限定の方は、非特定の場合が多いのである。この特定、非特定という概念は英語の定冠詞と不定冠詞に似ているようである。この特定、非特定の対立は次の二つの面からみることができる。

3-2-1.

「だけ」の用例はさることながら、「ばかり」の用例を調べるとき、一つ強く印象に残るのは、「だけ」に置き換えられる「ばかり」、つまり「ばかり₁」の限定される対象になっているものには、指示代名詞あるいは人称代名詞が多いことである。言い換えれば、指示代名詞や人称代名詞があれば、「だけ」の限定にはもっともあうようになり、また、「ばかり」で限定した文は、その「ばかり」を「ばかり₁」と解釈する可能性が高いと思われる。前出の例文①も指示代名詞の例であった。もう少し、実例を加えてみたい。

① 「しかし、私は、お嬢さんの口からじかに聞いております」

「黙りたまえ」矢部社長は、怒鳴りつけた。

「しかし、こればかりは、黙ってられません。私は、昨夜の喧嘩のことについては、一切、弁解いたしません。」(源氏鶏太『青年の椅子』)

㉔ お化けの登場する小説を書いていた十二才の私にとっては、非常に神秘的な夢のような体験で、その時ばかりは小説より詩の方が高級だという気がした。(『読売新聞』)

㉕ 130分の1とはいえ、この日の敗戦ばかりはそんな数字では勘算できない重みを持っていた。(新聞『プロ野球』)

㉖ さすが、博覧強記を持って自負している先生にも、この名ばかりは何のことだかわからない。(芥川龍之介『手巾』)

㉗ 「まあ、そうあせりなさんな」

「あんたは、不人情ですぞ」

「これは、聞き捨てならん」

「だって、自分ばかりいいことをしておいて」

「それもそうだな」(源氏鶏太『青年の椅子』)

㉘ 「いい生活だな」

「あら、どうして?」

「外は風がごうごうと吹き荒さんでいるのにさ、君ばかりは何時までたつても変らない」

(林芙美子『林芙美子傑作集』)

これらの例文にある「ばかり」の限定対象は、いずれも指示代名詞や人称代名詞で表わされ、あるいは修飾されている。代名詞というのは、文の中で大体中心的存在の部分に使われる傾向がある。文の中の中心というのは、主題とか、主語、あるいは目的語などになるだろう。筆者(陳 1993)は別の角度——動詞述語より遠いか近いか——から主題や主語に対立概念を思い出しやすいということで、個限定の「だけ」が用いられやすいが、たとえ、そこに「ばかり」を使ったとしても、その「ばかり」は「だけ」に置き換えられやすいということを指摘したことがある。だから、本稿において、代名詞が限定の対象に出た場合、その限定の副助詞「ばかり」は「ばかり₁」に属する可能性が高いと主張することは、陳(1993)でいった主題や主語に出る「ばかり」が「だけ」に置き換えられる確率が高いということと、いってみれば同じ発想の線上における延長である。

「だけ」に置き換えられない「ばかり₂」の方は、全然指示代名詞や人称代名詞が使えないのか。詳しく調べていないが、少なくとも次のことがいえるかと思う。つまり、「出発するだけだ」、「運び出すばかりだ」などの動詞を限定の対象にした文を問題外として、「ばかり₁」の実例では、たとえ、その限定される対象に代名詞を使っていなくても、ほとんどのものが代名詞をその前に加えられ、あるいは代名詞で置き換えられてもかまわない。これに対して、「ばかり₂」の限定対象に、まず、代名詞が出る例が少ないことはさることながら、かりに代名詞が出ない限定対象の前に代名詞を加えようとしても、違った意味になるかダメな文になる傾向があるのである。まず、「だけ」の実例からみてみたい。

㉙ お酒だけが、失われた“土人の心”を呼び覚ますのではないだろうか。(森村桂『天国に一番近い島』)

㉙' このお酒だけが、失われた“土人の心”を呼び覚ますのではないだろうか。

㉙に「この」を加えた㉙'はほとんど意味的な差がないといえる。次は「ばかり₁」の実例である。

㉚ 「多分なんですか」

「しかし、辞令ばかりは貰ってこないことには。ですから、あともう一押し、念のために矢部商会からうちの社長へ押してくれませんか」(源氏鶏太『青年の椅子』)

③①' 「多分なんですか」

「しかし、この辞令ばかりは貰ってみないことには、ですから、あともう一押し、念のために矢部商会からうちの社長へ押してくれませんか」

③② の「辞令」は主題になっているから、陳(1993)の角度からみてもこの文は個限定になりやすいのである。ここで、③①' のように、「辞令」の前に「この」を加え、つまり、その部分を特定化しても、元の ③② とそれほど意味が変わらないことが分かる。最初から ③② の「辞令」を、すでに特定された「辞令」と理解するかどうかは別問題だが、こういう代名詞の添加が可能な「ばかり」に限って、「だけ」との置き換えもできる「ばかり₁」に偏るのは決して偶然とは思えない。

今度は「ばかり₂」について考えるが、③⑤ ③⑥ ③⑧ ③⑨ は、動詞そのものを限定の対象にしているから、当然「この」などで特定化することができない。次のように名詞が類限定の対象になっている文だからその制限がないはずなのに、いずれもその名詞対象の前に「この」たぐいのものを加えられないようである。

③① 世間の人は私が彫刻ばかりに心を奪われているのを怒っているのです。(『読売新聞』)

③①' ×世間の人は私がこの彫刻ばかりに心を奪われているのを怒っているのです。

③② 馬鹿のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしておりました。(芥川龍之介『くもの糸』)

③②' ×馬鹿のように大きな口を開いたまま、この眼ばかり動かしておりました。

③③ 肺炎になり、それがこじれて寝ついてからは癩癩ばかり起こしていた。(『読売新聞』)

③③' ×肺炎になり、それがこじれて寝ついてからはこの癩癩ばかり起こしていた。

③④ ヤシの実ばかり飲まされるのはつらいけれど、世界中でいちばん早く太陽の昇る島なんて、ぜひ行ってみたい。(森村桂『天国に一番近い島』)

③④' ×このヤシの実ばかり飲まされるのはつらいけれど、世界中でいちばん早く太陽の昇る島なんて、ぜひ行ってみたい。

よほどひねくれた意味を表わそうとしているのでなければ、③① ③② ③③ ③④ はまず類限定と理解する方が普通である。その解釈の元では、③①' ③②' ③③' ③④' のように、「この」で特定しない方が自然である。もちろん、③① ③④ などのように、「この」を加えた ③①' ③④' が何時でもダメだということはない。よほど特殊な「彫刻」や特殊な「ヤシの実」をいうつもりの場合なら、③①' ③④' はいえなくもない。もし、③①' ③④' の意味でいった ③① ③④ だというなら、もはや ③① ③④ は類限定の解釈しか成り立たない「ばかり₂」ではなくなり、「ばかり」一身で個限定と類限定を兼ねて持つ「ばかり₁」と理解しなければならぬのではないのか。そういう場合、少しニュアンスの差を気にさえしなければ、「ばかり₁」の ③①' ③④' は、思い切って、「だけ」に言い換えてもよいはずであるが、

しかし、類限定に「この」が出にくいなら、何が出やすいか。ここでも物事を指すことばで考えるが、その指し示す方法に違いがあるのである。③① ③② ③③ ③④ で考えれば、たとえば「こん

な」「そんな」や「ような」などの、代表者を一つ挙げて、その背後に一群が存在することをほのめかす、いい方を変えれば、あるものを特に指し示さない、非特定を表わすことばが挙げられるかと思う。

- ③①' 世間の人は私がそんな彫刻ばかりに心を奪われているのを怒っているのです。
 ③②' ?馬鹿のように大きな口を開いたまま、そんな眼ばかり動かしておりました。
 ③③' ?肺炎になり、それがこじれて寝ついてからはそんな癩癩ばかり起こしていた。
 ③④' そんなヤシの実ばかり飲まされるのはつらいけれど、世界中でいちばん早く太陽の昇る島なんて、ぜひ行ってみたい。

「そんな」を入れた ③②' ③③' はいささか奇妙な感じがあるが、③①' ③④' は比較的素直に「そんな」を受け入れた。③②' と ③③' の「そんな」拒絶は、もともと一つの動作を構成しているものから、その内部の一部である名詞（「眼」「癩癩」）を取り出して「そんな」で修飾するよりもそれ全体をまとめて、「そんなに」で修飾した方がよりよいからだろう。その文の表現している内容によると考えられ、類限定の体質からみれば、「そんな」「こんな」などは類限定に合うと思われる。次に実例も挙げておきたい。

- ③⑤ 「何をいい出すんですか」
 「そうよ、部長さん。さっきからお母さんは、そんなことばかりおっしゃるんですよ。あたし、困ってしまうわ」（源氏鶏太『青年の椅子』）
 ③⑥ しかし、さっきは、どうしてもその気になれなかったのである。妙にからんだようないいかたばかりされた上、高坂虎彦の悪口も聞かされた。（源氏鶏太『青年の椅子』）

3-2-2.

同じく特定・非特定の線で論を進めていくが、今度、「だけ」と「ばかり」の違いから、「ばかり₁」と「ばかり₂」の説に何か貢献はないか、をみてみたい。

- ③⑦ おかずばかり食べないで、～
 ③⑧ おかずだけ食べないで、～
 ③⑦ の否定は「おかずばかり食べ(る)」という事柄全体に対して行っていると考えられるが、③⑧ の否定は「おかず」に対して行っていると思われる。だから、その後ろに文を続けるとしたら、
 ③⑦' おかずばかり食べないで、ご飯も食べなさい。
 ③⑧' おかずだけ食べないで、あれは少し味が変です。
 にでもなるかと思う。「おかずを食べた」か否かに関して、両者の間で、一番違っているのは、③⑦' は「おかず」を食べることになるが、③⑧' は食べないことになるのである。つまり、「ばかり」の場合は、必ずしも「おかず」を取り立てない。③⑦' はとくに「おかず」を問題にしないから、その否定は「おかずばかり食べ(る)」という表現全体にいくが、その内部の一部である「おか

ず」にいかない。しかし、両者の区別をなくす方法がある。㉞に取立の助詞「は」を入れてみよう。

㉞' おかずばかりは食べないで、あれは少し味が変です。

こうなると、㉞'は㉞と同じ意味になってしまう。つまり、㉞'の否定も今度は、「おかずばかり食べ(る)」全体ではなく、その内部の「おかず」だけに向かうようになってしまうのである。焦点が「おかず」だけになった㉞'においては、「おかず」を食べないことになり、個限定の「だけ」を用いた㉞と同じことになってしまう。

ここまできて、今までのいい方を訂正しなければならない。㉞は、かりに「は」を付けなくても、㉞'の解釈を受けられる場合もなくはないことである。つまり、「おかずばかり食べないで、～」は、一つは㉞'の解釈となり、「おかず」も食べるが、ご飯も食べるという意味である。もう一つは、㉞'㉞'の「おかず」を食べない解釈である。「は」を付けることは、要するに、もともと二通りに解釈可能、つまり、類限定と個限定を持つ㉞を無理矢理にそのうちの一方の、ここではその限定対象を特定化し、続いて、個限定の解釈にならせるための文脈固定法にほかならない。本稿の立場からみれば、㉞の「ばかり」も「ばかり」に属し、類限定と個限定の両方を表わせるが、それを個限定としてだけ用いようとするとき、その「ばかり」を「だけ」に置き換えるのは、方法の一つだが、㉞'のようにそれに「は」を付けるのも、その「ばかり」を個限定に固定する方法の一つでもある。「は」は、要するに、文中のある部分をとくに取り立てる——特定化するマークである。

ただし、「は」を付けることは、「ばかり」のうちの個限定の部分を顕在化させるための手段にすぎず、「は」を付けるか否かを大きく左右するのは、むしろ、否定の「ない」である。否定の文によく取立の「は」を伴うということは、現代日本語において、常識になっている。㉞もやはり、否定の「ない」が後ろにあったから、「は」をいとも簡単に入れられた。「は」が個限定の顕在化のマークだから、たとえ、それがなくてももともと個限定がすでにあったことに支障がないのである。本稿がここでいいたいのは、むしろ、否定表現は「は」の使用を引き起こし、「は」は「ばかり」の中に生まれ付きにあった個限定の部分を顕在化させる機能があるのだということである。つまり、否定が後ろに控えた「ばかり」はほとんど「ばかり」に属するものである。次の「ばかり」の実例がいずれも「だけ」に置き換えられることからそのことが分かると思う。

㉞ しかし、学校にとってはいいとばかりはいえません。(西陰浩子『日本語教室の窓から』)

㉞ 愛とか恋というばかりではなく、ごく普通の感情をきれいに、しかもリズムカルに歌いあげていますから、学生にとっては学校では学べない、自分の気持ちにぴったりした表現に出会うことができるのです。(西陰浩子『日本語教室の窓から』)

㉞ あなたも病人にばかり構っておらず、仕事も少しはなさらなければいけないね。(『読売新聞』)

4. 結 び に

以上、限定の副助詞「ばかり」を「ばかり₁」と「ばかり₂」に分けるために、それと共起する副詞グループ(「ただ」グループと「いつも」グループ)、文におけるポジション(動詞の進行形の真ん中や増長する動詞の現在形の後ろ)、特定化、非特定(限定対象に「この」を付け加えられるか否かと否定表現をとまうか)、などの面から論を進めてきた。これらの諸面は、同時に文に現われることも有り得る。現に、今まで挙げてきた事例に二つ以上の面にまたがるものがあつた。複数の面で同じく個限定の特徴を持つなら、その分だけ個限定としての可能性が高い。反対に、複数の面で類限定の特徴を呈するなら、その分だけ類限定としての可能性が高くなると予想される。また、限定と否定との関係はまだ検討する余地があるが、今後の課題としたい。

付 記

熱心に本稿のインフォーマントになってくださった同僚の糸目明先生、短期で鹿児島県教育委員会からシンガポール国立大学にお越しの新里正治先生、加賀真人先生、およびいろいろな面で便宜を計ってくださった方々に感謝を申し上げます。

参 考 文 献

- 陳 連 冬 (1992) 「「だけ」と「ばかり」について——個限定と類限定の観点」、『青山語文』22号。
—— 「「ばかり」の限定について」(シンガポール国立大学日本研究学科主催第三回国際シンポジウム [1993年10月25日]における口頭発表)。
森田良行 (1972) 「「だけ、ばかり」の用法」、『早稲田大学語学教育研究所紀要』10。
山中美恵子 (1993) 「限定と否定」、『日本語教育』79号。